

「もの資料」から生まれる新たな視点

国立歴史民俗博物館の展示と研究

井原今朝男

総合研究大学院大学教授 日本歴史研究専攻 / 人間文化研究機構国立歴史民俗博物館・歴史資料センター長

国立歴史民俗博物館は、「もの資料」、すなわち非文献資料にもとづいて、歴史に関する展示を行う博物館である。近年、日本をとりまく国際環境が大きく変化したのにもなって日本人の歴史意識も多様化し、新たな視点に立った日本史研究への取り組みが始まっている。

歴博の役割の変化

1981年に創設された国立歴史民俗博物館（以下、歴博）は、大阪の国立民族学博物館と同様、大学共同利用機関であり博物館であるという二つの役割をもってきた。とくに設立当初は、大型模型を駆使した大規模展示を行う国立の歴史博物館として注目を集め、毎年30万人もの入館者を集めた。しかし、1990年代末までには、全国各地に県立の歴史博物館や民俗資料館が次々と設立され、地域の歴史や文化に即した斬新な手法による展示を行うようになった。そして、国内唯一の大規模歴史博物館という歴博の立場

は、終わりを迎えた。

1999年から2000年になると、国立博物館を独立法人化する問題が生じた。それと同時に、歴博の独自性が問われることになった。

ちょうどその頃は、大学における日本の歴史・文化研究が激変期を迎えた時期であった。1990年代の大学改革により、文学部系の国史学の多くが比較文化論系に変わり、教育学部系社会科教育の研究者は地域貢献や地域史研究へとシフトしたのである。民俗学分野や国文学分野においても、同様の変化が起きた。また考古学分野では、大学・研究機関での研究と、行政発掘調査のための考古学とが二

分するという状況が続いていた。

こうした中で、全国の大学・研究所から研究者を結集して、多様で独創的な先端的共同研究を行っていく必要性がこれまで以上に求められた。また、資料の膨大化や、研究のシステム化・大規模化に対しても、協同して対処していくことが必要となっていた。そこで歴博は、それらに 대응べく、日本の歴史と文化に関する先端的な共同研究を推進する機関として存在し続けることを決意したのである。正式には、2004年に、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構の一機関となった。高額資料群の海外への流出防止や資料収集事業推進においても、歴博を中心とした組織的な対応が期待されている。

科学的な調査方法を取り入れる

博物館における研究の独自性は、研究成果を展示物として表象・表現することにある。博物館での「もの資料」は、展示資料と研究資料という二面性をもつのである。

ところで、研究資料として高い価値をもつものが、展示資料としても有用とはかぎらない。そこで、まずは幅広い「もの資料」を収集・保存・管理するところから始める。そして次に、それらを研究資料として分析し、どのような情報が引き出せるか、どのように高度利用できるかを探る研究が必要となる。すなわち、「もの資料」から情報を抽出すること



炭素14年代測定法に使う試料を精製する装置。木材や炭、紙などを起源にもつ遺物を試料に用いる。まずは試料の不純物や異物などを取り除いて精製をする。

企画展示「古代 日本文字のある風景」で、石川県加茂遺跡から出土した加賀郡勝示札を複製したもの。地方の郡役人が勝示札に書かれた内容を読み聞かせているところ。音声はスピーカーから流した。



(高度歴史情報化)と、資料のもつ多様性や限界性を探求すること(資料批判学)が重要なのである。

情報の抽出において、歴博では、科学的な調査方法を歴史研究に取り入れることを重視している。その具体的な例として、非常に大きな話題を呼んだのが、AMS法(加速器質量分析法)による炭素14年代測定法の活用である。これは、試料中の炭素14同位体濃度をもとに年代を推定する方法であるが、自然科学分野では多用されているにもかかわらず、歴史研究では活用されていなかった。歴博では、この年代測定法を使用して、1997年より研究を行ってきた。そして、2003年に、弥生時代の開始年代がこれまでの通説である紀元前300年よりも約500年さかのぼる可能性が高いという問題提起を行うに至ったのである。これは、単に

考古学のみの問題ではなく、当時における中国・朝鮮・日本の交流のあり方や通史的な時期区分論にも関連する大きな問題であり、学界のみならず、一般社会からも非常に大きな反響を得ることができた。

このような資料の高度歴史情報化と科学的調査による年代研究は、2002年に歴博の基盤研究として位置づけられた。現在、水木家資料の研究や、江戸図屏風の資料学的分析、民俗研究映像の資料論的研究、明治地籍図の集成的研究、高松宮家伝来禁裏本の基礎研究などが実施され、学界やコミュニティでの日本歴史・文化研究の創造に大きく寄与している。

【もの資料】が導く学際的な共同研究

歴博における展示では、文献史学のように古文書や古記録・典籍などの史料の

みで展示を構成することは不可能である。歴史や文化を表すには、入館者が見たり、聞いたり、触れたり、体感することのできる具体的な「もの資料」が重要となってくる。そのため、絵画資料、工芸資料、金石文、建築資料、発掘出土品、遺物、民具、祭りや諸行事などの民俗資料、人の語りや口承資料、映像資料などの多彩な展示資料コレクションが必要不可欠となる。その結果、博物館での歴史・文化研究は、必然的に、歴史や考古学、民俗学をはじめ、絵画、建築、土木、化学分析などの関連諸学との学際的研究とならざるをえない。

それが、初代館長・井上光貞が提唱した歴史、民俗、考古、三学連携の学際的研究の方法であった。科学研究では、分野が異なれば、そこで使用される概念や方法論もそれぞれ異なるから、まずはそ



企画展示「中世寺院の姿と暮らし——密教・禅僧・湯屋」で復元された密教儀礼の空間。後七日後修法が毎年実施されていた。

の独自性を尊重し理解しあう姿勢を大前提とする。その上で、異分野間での概念の共通化をめざして検討を行い、新しい方法論を探っていく。

このような諸学連携にもとづいて、新しい日本歴史・文化を探っていこうとする歴博のコンセプトは、近年、国際的にも高く評価されるようになった。

たとえば、2002年に国際シンポジウム「古代東アジアにおける倭と加耶の交流」を開催したが、それを契機に考古学・民俗学系での国際交流が韓国との間に始まった。そしてその翌年には、韓国国立民俗博物館や韓国国立文化財研究所と学術交流協定を締結するに至り、その後の国際的共同研究を進めるきっかけとなった。

フランスでは、EU統合にともない、「ヨーロッパ地中海文明博物館」という

研究博物館をマルセイユに建設中である。開館予定は2009年で、その研究組織は、フランス、ドイツ、ベルギー、イギリス、イタリアなどの研究者を含むものであり、歴史学、民俗学、考古学、人類学などの連携による、新しい学際的歴史研究をめざしている。こうした背景の中、2002年、フランス国立民俗博物館のミシェル・コラルデル館長は、先進的な学際的研究を蓄積してきた歴博との共同研究を申し込んできた。歴博では、中世考古学研究におけるこれまでの蓄積や企画展示「天下統一と城」の成果をもとに国際共同研究を準備し、2004年には、「中世城郭の社会的機能～その日欧比較」というシンポジウムを実現させた。封建制などの概念的な問題ではなく、中世城郭という「もの資料」をテーマに日欧比較を行い、中世社会における城郭の機能

と役割についての分析的視点を共有することができた。共同研究はその後も継続され、今回は、パリでシンポジウムが開催される。

展示への取り組みが新しい研究テーマを創造する

すでに触れたように、博物館における研究では研究成果を展示として表象化する必要が生じる。そのためには、展示構成、展示意図、展示シナリオ、展示資料目録などを明確にして計画することが必要である。その結果、歴博では、3年間をかけた展示プロジェクトの組織化が不可欠となる。

日本の歴史・文化を展示していく上で、イメージを正確に伝えるために日常生活の復元展示を行う場合には、歴史景観復元や模型製作、資料複製などが必要

となることが多い。ところが、この模型製作や資料複製のためにはさまざまな情報や知識が必要となり、これまでの既存の学界・コミュニティでの研究成果の活用だけでは不十分なことが多々ある。むしろ、模型製作や資料複製のために、新しい研究が必要となってくることが多い。すなわち、展示に取り組む過程の中で、新たな研究課題が発見されていくのである。

2002年の企画展示「古代 日本文字のある風景」は、漢字は5世紀代に流入したとするそれまでの通説を根本的に再検討する機会となった。日本に文字が入ってきた初期の頃の文書、木簡、土器などの出土品を全国各地から一堂に集め、文字の流入時期は3世紀～4世紀に繰り上がる事が明確になった。文字は、漢字として意味や読みがわかった上で導入されたのではなく、それ以前に読めないまま記号や呪術として人々に受容されていたのではないかと。文字社会がその習熟度を増すにつれて、文字の読みと意味が定着したのではないかとという仮説にもとづいた展示シナリオが作成された。これは、日本において無文字社会の転換期をどのように理解するかという新しい研究課題を生み出し、反響は大きかった。言語学や国語学はもとより、漢字研究や文化人類学における無文字社会研究との共同研究の必要性が提起された。

さらに、古代では文字を読み聞かせる必要度が高かったことが、展示研究の過程で確認された。石川県加茂遺跡から出土した加賀郡勝示札の複製を作り、展示を行った。勝示札とは、生活の心得などに関する御触書のことである。道路の交差点に勝示札を立て、地方の郡役人が読み聞かせている歴史景観を復元し、スピーカーで音声流した。口承伝達や宣することに重きが置かれ、発音を前提にした文章制作の方法が重視されたことなど、旧来の古文書学とは異なった新しい文書研究の課題を提起することができた。

同じく2002年の企画展示に、「中世寺院の姿とくらし——密教・禅僧・湯屋」



企画展示「古代 日本文字のある風景」では、さまざまな文書、木簡、土器、金石文などを全国各地から集めて展示した。

がある。ここでは、寺院の宗派や地域、時代、階層性を超えて、中世という時代における寺院としての共通性はなにかという問いを発し、「中世寺院」という概念の必要性を提起する展示研究を行った。これまでの寺院史研究は、顕密寺院や禅宗寺院というように宗派別になされており、東大寺などの権力をもった中央権門寺院のみが研究対象とされ、鎌倉仏教と室町仏教も区別して議論されていた。こうした学界状況を批判し、新しい研究領域を開拓しようとする試みがこの企画展示であった。平安前期に最盛期を迎えた真言・天台密教は、鎌倉時代には国家的法会として実施され、貴族や武士のみならず広く民衆にも浸透し、中世寺院が人々の生活と密接に結びついていたことを示すことができた。こうした問題提起は、仏教界、学界に少なからぬ影響を与えることとなった。

ここでは一、二の事例のみ紹介したが、展示の過程での共同研究を通して、日本

の歴史・文化に関する新たな研究分野の開拓や概念・方法論の提起には枚挙に暇がない。歴博はこうした展示研究により、先端的歴史研究を導いているのである。



井原今朝男(いはら・けさお)

2005年度から、歴博基幹研究「生業・権力と知の体系に関する歴史的研究」のチームリーダーとしての仕事が始まる。近代合理主義の視点からみると、民衆がもっていた知的体系は呪術や迷信が混在した不合理なものにみえようとも、当時は理にかなった体系性をそなえ、権力も含めて知的体系を集積していたと思われる社会構造について分析したい。多様な異分野の共同研究者による議論の行方が楽しみである。